

寺子屋 素読ノ会

名作古典を読む 有志サークル

[最新情報]

2010年2月より、B「風姿花伝」 D「南方録」 昼間クラス スタート!

2010年2月より、C「奥の細道」 第二期コース(夜) 新規開講!



主旨:

千年の名著といわれる日本の古典を読み、学び、親しむ"大人の寺子屋"です。

各クラス指定作品を一冊完読。サークル会員全員で味わい深い原文を音読。時代背景や他分野への日本文化の広がりつつながりも学んでいきましょう。

武士道・茶道・禅・仏教・能・俳諧など、中世の偉人、達人の輝く智慧と精神性をたどり、現代を強く生き抜く力を身につけたいと思います。

実施要綱:

「葉隠」(夜)「風姿花伝」(昼・夜)「奥の細道」(夜)「南方録」(昼・夜)の全4コース、6クラス。

月1回、各90分。1作品を読了した時点で終講となります。

各作品おおよそ12~24ヶ月予定。開催日は裏面スケジュール参照。

サークル代表者: 水野聡(言の葉庵主宰)

参加費(施設・設備・資料等のサークル運営費) 1回 ¥1500

参加費は参加当日会場にて徴収します。

各コースの指定テキストは各自でご購入、ご用意の上お持ちください。

テキストは裏面カリキュラム参照。 当会よりテキストのプリント提供はありません。

お忘れの場合「素読」できませんのでご注意ください。

当会は、古典同好有志による非営利目的・共同学習サークルです。サークル入会希望の方はお気軽に、下記あてお問い合わせください。各クラス途中参加大歓迎! 初参加の方には、それまでの講座進行概略をご案内します。



寺子屋 素読ノ会



コース

コース	曜日・時間	会場 / 定員	参加運営費	テキスト	注意事項
日程は下記スケジュール参照		各自ご用意			
A「葉隠」夜	第一月曜日 17:30-19:00	生涯学習センター パルーン (新橋) 二階・三階 会議室 当日1階ロビーの掲示板で教室番号をご確認ください。 定員 / 各クラス 15名	各コース一回 ¥1500	「葉隠 上」岩波文庫 和辻哲郎, 古川 哲史 著 ¥630	
B「風姿花伝」昼・夜	第三水曜日 13:00-14:30 第一月曜日 19:30-21:00			「風姿花伝」岩波文庫 世阿弥 著, 野上 豊一郎 ¥483	
Cクラス「奥の細道」夜	第四月曜日 17:30-19:00			「芭蕉 おくのほそ道」岩波文庫 萩原 恭男 ¥735	
D「南方録」昼・夜	第三水曜日 15:00-16:30 第四月曜日 19:30-21:00			「南方録」岩波文庫 南坊 宗啓 著, 西山 松之助 ¥987	

スケジュール： 2010/1/5 現在

印は、祝日等のための日程変更(各指定曜日ではありません)あり。ご注意ください。

年月	2010 1月	2010 2月	2010 3月	2010 4月	2010 5月	2010 6月	2010 7月	2010 8月	2010 9月	2010 10月	2010 11月
A「葉隠」夜	4	1	1	5	10	7	5	2	6	4	1
B「風姿花伝」昼	-	17	17	21	19	16	21	18	15	20	17
B「風姿花伝」夜	4	1	1	5	10	7	5	2	6	4	1
C「奥の細道」夜	-	22	29	26	24	28	26	23	27	25	22
D「南方録」昼	-	17	17	21	19	16	21	18	15	20	17
D「南方録」夜	25	22	29	26	24	28	26	23	27	25	22

会場：
新橋 生涯学習センター
(パルーン)

JR新橋駅 烏森口より
徒歩3分
〒105-0004
港区新橋3-16-3
Tel 03-3431-1606



Aクラス「葉隠」寺子屋講座資料より

テーマ：葉隠の“死”とは何か

葉隠にみる「死」のキーワード

- ・死ぬことと見つけたり
- ・只今の一念
- ・死に狂い
- ・死兵
- ・生死截断
- ・生死を離れる
- ・追腹

古来の死の表現

「天子の死を崩と曰ひ、諸侯は薨と曰ひ、大夫は卒と曰ひ、士は不禄と曰ひ、庶人は死と曰ふ」『礼記』曲礼篇より

死の名言

- ・武士道というは、死ぬことと見つけたり（葉隠）
- ・死に至る病とは、絶望のことである。
（キエルケゴール）
- ・人は死ぬ。だが死は敗北ではない。
（ヘミングウェイ）
- ・死は人生の終末ではない 生涯の完成である
（マルティン・ルター）
- ・未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん （論語）

辞世の句

- ・山崎宗鑑（一五五三没 享年八十九）
「宗鑑はいつこへと人の問うならば
ちとようありてあの世へといえ」
- ・千利休（一五九一没 享年六十九）
「人世七十 力圍希咄（カーツ、トーツ）吾這宝剣
祖仏と共に殺す 堤ぐる我が得具足の一つ太刀 今
この時ぞ天に抛」
- ・松尾芭蕉（一六九四没 享年五十）
「旅に病んで 夢は枯野をかけめぐる」
- ・安藤広重（一八五八没 享年六十一）
「東路に筆を残して旅の空
西のみくにの名所を見む」
- ・乞食女（一六七二没 享年不明）
「ながらえばありつる程の浮世ぞと
思えば残る言の葉もなし」
（返歌 新著聞集）
「言の葉は長し短し身のほどを
思えば濡るる袖の白妙」

・庶民の娘（年代不明 享年二十八）
（題：湯灌いや）「おのづから心の水の清ければ
いづれの水に身をや清めん」
（題：経かたびらいや）「生まれ来て身には一重
も着ざりけり 浮世の垢をぬぎて帰れば」
（題：引導いや）「死ぬる身の教えなきとも
迷うまじ 元来し道をすぐに帰れば」

・豊臣秀吉（一五九八没 享年六十三）
「露と落ち露と消えにし我身かな
難波の事も夢のまた夢」

・徳川家康（一六一六没 享年七十五）
「嬉しやと二度さめて一眠り
うき世の夢は暁の空」

・浅野内匠守（長矩）（一七〇一没 享年三十五）
「風さそう花よりも猶我はまた
春の名残りをいかにとかせん

・大石内蔵助（良雄）（一七〇三没 享年四十四）
「あらし思いは晴るる身は捨る
浮世の外にかかる雲なし」

葉隠 聞書一 二 武士道というは、死ぬことと見つけたり。

武士道とは、死ぬことと見つけたり。生死分かれ目の場に臨んで、さっさと死ぬ方につくばかりのこと。特に仔細などない。胸すわって進むのだ。うまく行かねば犬死、などとは上方風の打ち上がった武道のこと。生か死かの場面で、うまく行くかどうかなどわかるわけもない。人皆生きる方が好きである。されば、好きな方に理屈をつける。もしうまくいかずに生き残ってしまえば腰抜けだ。この境目が危うい。うまく行かずに死んでしまえば犬死で気違いである。しかれども、恥にはならぬ。これを武道の大丈夫という。毎朝毎夕くり返し何度も死んでみて、常時死に身となって居れば、武道に自由を得、一生落度なく家職も仕果たせるものである。

聞書一 一一四 武士道に於ては死狂ひなり。

一一四 「武士道とは死に狂いすることである。たとえ数十人でもかかって一人の死に狂いする者は殺せないものだ」と直茂公はいった。正気にて大業はならず。気違いとなって、死に狂いするまでだ。また武道を嗜み分別ができれば、すなわち遅れを取るることとなる。忠も孝もいらぬ。武士道においては死に狂ひなり。この内に、忠孝はおのづから籠もるものである。

Bクラス「風姿花伝」寺子屋講座資料より

世阿弥とは

室町時代の能楽の大成者。実名、観世三郎元清(一三六三～一四四三)。幼名、鬼夜叉、または藤若。中年以降の芸名を世阿弥陀仏と称した。

申楽に音曲・作曲面で改革を行い、今日の能の基礎を確立した観阿弥の一子で、二代目観世太夫を継承する。

父観阿弥より能役者としての英才教育を、パトロンである將軍足利義満、北朝公家二条良基等により庇護、寵愛を受け高度な上流教育を享受する。稀代の美童にして歌舞の逸材でもあった世阿弥は、天賦の才に加えこれら宮廷文化を存分に吸収。民衆芸能申楽を美と幽玄を主とする総合舞台芸術、能へと昇華・大成させることとなる。

自身、太夫として一座を率いる看板役者であったが、今日なお盛んに演能される数々の名作『高砂』『井筒』『西行桜』等の作者でもあり、本作『風姿花伝』をはじめとする二十一にも及ぶ能芸論書の著作者、理論家でもあった。演者・作者・理論家を一身に兼ね備え、世界芸術史的にも稀な天才と評され、六百年を経た今日においても代表作『風姿花伝』は、その普遍的価値により海外でも訳出され、多くの読者に親しまれている。

風姿花伝とは

能の大成者、世阿弥が亡父観阿弥の遺訓を基に著した、日本最古の能楽理論書である。『花伝書』の名称でも知られる本書は、「花」と「幽玄」をキーワードに、日本人にとっての美を深く探求。体系立った理論、美しく含蓄のある言葉、彫琢された名文で構成される、世界にも稀な芸術家自身による汎芸術論として位置づけられよう。全体は七編から成立する。第三編までが一四〇〇年(応永七年、著者三十八歳)、四・五編が一四〇二年、六・七編が一四一二年に、それぞれ成立。完成までに約二十年の歳月を要している。この間、増補・改訂がなされた可能性も高く、本書成立には複雑な過程が想定される。第一から第五までが本編、第六・第七は外伝とでもいうべき内容だ。各編の要約は下記。

各篇の要約

序

申楽の歴史を簡潔に述べ、この道を行こうとする者へ守るべき芸の本流を示す。本編への巻頭言として好色・大酒・博打への戒めを掲げる。

第一 年来稽古條々

申楽者の生涯を各年代別に分け、修行と工夫の方法を説く。たとえば幼、少年期の「時分の花」、青年期の「初心の花」。いずれもまことの花とはいえない

い。一時の名声に惑わされることなくまことの花を会得することこそこの道の奥義であるとする。まことの花を得た、ただひとりの例として観阿弥の古い木に残る花の舞台を引く。今日、教育論・コーチングの視点から見ても示唆に富む一編。

第二 物学條々

申楽芸の根本である物真似の技術を女、老人、直面、物狂など九つの題材別に俯瞰する。鬼の物真似は「上手く真似るほど面白くなる」という秘事。また無上の大事「老人の舞い姿」など、深い人間観察と舞台経験に基づき物学(ものまねび)の本質に触れる。

第三 問答條々

演能に際しての具体的、実践的演出方法および、能に花を咲かせるための工夫と秘訣を問答体で説く。「開演前の客席を見るだけで、その日の能の出来・不出来を占う方法」「序破急とは」「立会い勝負を制するには」「なぜ下手は、下手なのか」「能の位とは」「花とは何か」。問答のひとつひとつに知ることと会得することの根本的な違いが鮮やかに描き出されている。

第四 神儀に云わく

元来、別書であった申楽起源伝承が後に『風姿花伝』第四として位置づけられた。申楽者に芸の正統性に対する誇りと家芸を重んじる精神の自覚を促すために書かれた一編。

第五 奥儀に讃歎して云わく

「その風(伝統)を得て、心より心に伝えていく花」として『風姿花伝』書名の由来を述べる。大和申楽と近江申楽、申楽と田楽の芸風の違いを説きながら、芸の築き方や舞台に立つ心構えを示す。また芸能は「諸人の心を和ませ、感動を与える幸福の根本」であると明確に定義づけ、欲得を萌しこの道を廃れさせることのないよう強く戒める。

第六 花修に云わく

花を究め、能の本道を知る手立てを表す。具体的には、まず作能の手引きとして名作の条件を示す。「音曲・働き一心の口伝」「強い・幽玄、弱い・荒いの違い」「釣合うということ」などの例を引きつつ、次第に「能を知る」ということへ導いていく。

第七別紙口伝

九項にわたる口伝を世阿弥独自の名文句で綴る。「年々去来の花(初心忘るべからず)」、「秘すれば花」「古い木に花の咲くごとく」。能の永遠のテーマである「花」のイメージをあらゆる角度から見つめ、本質に迫ろうとしたものである。一子相伝とし、「継ぐもの、守るものを知る」者にのみこの書が伝えられることを記して『風姿花伝』は結ばれる。

Cクラス「奥の細道」寺子屋講座資料より

俳諧とは

主に江戸時代に栄えた韻律詩文芸。正しくは俳諧連歌と呼び、本来の連歌から分岐して、遊戯性を高めた集団文芸である。「俳諧」にはそもそも「滑稽」「戯れ」といった意味がある。江戸初期、松尾芭蕉の登場により冒頭の発句の独立性が高まり、発句単独で鑑賞されるようにもなったため明治時代に成立した俳句の源流とされる。

室町時代後期の山崎宗鑑が俳諧の祖と呼ばれる。江戸時代、松永貞徳によって大成され、俳諧は連歌をしのいで大いに興隆する。貞徳一派は「貞門派」と呼ばれ一時代を築く。のちに遊戯的な句風の西山宗因が「談林派」を興し、ついで松尾芭蕉があらわれ、精神性・芸術性の高い「蕉風」と呼ばれる句風を確立した。付け句のスタイルにより、貞門派の「詞付」、談林派の「心付」に対して、蕉風は「句付」と評された。

・鎌倉～室町時代 【連歌】
心敬、飯尾宗祇

・戦国～江戸時代 【俳諧】
山崎宗鑑 松永貞徳、北村季吟「貞門派」 西
山宗因、井原西鶴「談林派」
松尾芭蕉「蕉風」
与謝蕪村(中興の祖)、小林一茶等

・明治時代 【俳句】
正岡子規、河東碧梧桐、高浜虚子等

松尾芭蕉

寛永二年～元禄七年(1644～1694)。伊賀国上野の人。父は松尾姓。幼名金作、成長して名を宗房という。俳号をはじめ宗房(そうぼう)、後に桃青(とうせい)といった。「芭蕉」は門人が深川の庵に植樹した庭木にちなむ戯号である。若年にして伊賀上野、藤堂新七郎良精家に仕える。主君の若君藤堂良忠(俳号蝉吟)とともに俳諧を嗜むようになる。後、江戸に出て俳諧師の道に専念。延宝八年(1680)に「桃青門弟独吟二十歌仙」を刊行。当代の代表的選者と目されるようになる。が、同年深川に隠棲、草庵を結び芭蕉庵と称する。貞享一年(1684)以降、「野ざらし紀行」「鹿島詣」「笈の小文」「更科紀行」「おくのほそ道」などに描かれた旅行を繰り返し、その死もまた旅の途中、大坂においてであった。

旅に病んで 夢は枯野をかけめぐる (病中吟)



俳諧論「不易流行」、そして侘び、寂び、軽み、風狂など、その独自の句風にて近世日本文化の美的概念形成に大きな影響を与えた。また、「漂白の詩人」とも呼ばれ旅に生き、旅に死ぬ芸術的人生の完遂により、現在も多く信奉者、追隨者が後をたたない。その偉業により近代俳句の祖と目され、「俳聖」と称される。

俳禅一致の芭蕉の句

禅の精神性をたたえる、芭蕉の各期代表句を以下にご紹介する。

稲妻に悟らぬ人の貴さよ
(己が光)元禄3年

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり
(野ざらし紀行)小夜の中山

枯朶に烏のとまりけり秋の暮
(阿羅野)

木啄も庵はやぶらず夏木立
(奥の細道)元禄2年

この道を行く人なしに秋の暮
(窪田意専・服部土芳宛書簡元禄7年)

猿を聞人捨子に秋の風いかに
(野ざらし紀行)富士川の捨て子

閑さや岩にしみ入蝉の声
(奥の細道)立石寺 元禄2年

そのままよ月もたのまじ伊吹山
(真蹟懐紙)元禄2年

月はやし梢は雨を持ながら
寺に寝てまこと顔なる月見哉
(鹿島紀行)貞享4年

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな
(茅舎の感)延宝9年

古池や蛙飛びこむ水の音
(蛙合)貞享3年

Dクラス「南方録」寺子屋講座資料より

千利休

千利休 大永二年(1522) - 天正十九年二月二十八日(1591年4月21日)は中世末期、安土桃山時代の茶人。侘び茶(草庵の茶)の完成者として知られる。父は田中与兵衛(田中與兵衛)、母は宝心妙樹。父の「千」は氏であり、利休の名字は田中である、名は与四郎(與四郎)。のち、法名を宗易(そうえき)、抛笠斎と号した。

広く知られた利休の名は堺の南宗寺の大林宗套から与えられた居士号で正親町天皇の勅許による。この名は『茶経』の作者とされる陸羽にちなんだものとの説がある。茶聖とも称せられる。

和泉の国堺の商家(屋号「魚屋(ととや)」)の生まれ。若年より茶の湯に親しみ、17歳で北向道陳、ついで武野紹鷗に師事し、京都郊外紫野の大徳寺に参禅。織田信長が堺を直轄地としたときに茶頭として召され、のち豊臣秀吉に仕えた。1585年の北野茶会を主催し、一時は秀吉の篤い信任を受けた。この時期、秀吉の正親町天皇への宮中献茶に奉仕し、居士号を許される。また北野大茶会の設営、黄金の茶室の設計などを行う一方、楽茶碗の製作・竹の花入の使用をはじめなど、侘び茶の完成へと向かっていく。いわば茶人としての名声の絶頂にあった利休だが、突然関白秀吉の勘気に触れ、切腹を命じられる。享年七十歳。

結婚は二回。先妻の子と後妻・宗恩の連れ子がそれぞれ堺千家・京千家を起こしたが、利休死去とともに千家は一時衰亡した。堺千家は再興せず、京千家の系譜のみが現在に伝わる。三千家は利休の養子となった宗恩の息子と利休の娘の間の子、利休の孫千宗旦が還俗して家を再興し、その次男・三男・四男がそれぞれ初代として茶道を継承したもので、表千家・裏千家・武者小路千家(別称は官休庵流)の総称である。

利休忌は陽暦(現在の日本の暦)の3月27日および3月28日に大徳寺で行われる。

南坊宗啓

桃山時代の禅僧。『南方録』筆者で利休茶の湯の弟子、堺の集雲庵の二世住持を称した。文禄二年(1593)二月、利休二周忌に香華を手向け立ち去ったという。百年後、立花実山により、博多南坊流の祖として立てられた。

立花実山

1655-1708。明暦~宝永年間の黒田藩士。『南方録』編者。父、立花平左衛門は黒田藩家老で、その次男として生まれる。通称、五郎座衛門、号、宗有・而生斎。八歳で藩主黒田光之に仕える。

茶の湯は、金森候茶堂道可より土屋宗俊に伝わる流れを学び、歌道・書・画をよくした。『南方録』の他、『岐路弁疑』『壺中炉談』など多くの茶書を残した。

南方録

千利休の茶法を伝える秘伝書。古来数多い茶書の中でも、最も重要視されてきた茶道の聖典とよばれる名著である。

利休の高弟、南坊宗啓の聞書で、利休が奥書・印可を加えたという。「覚書」「会」「棚」「書院」「台子」「墨引」「滅後」の七巻より成る。このうち「墨引」までは、利休在世中に成立。「滅後」は利休没後の成立(当然利休の奥書・印可はない)と伝える。

利休没後、著者南坊宗啓自身とともに、その所在は長らく不明となっていた。しかし、元禄三年(1690)筑前福岡侯黒田綱政の家臣、立花実山がこれらを偶然発見、書写・編集したといわれる。

南方録全七巻を三部に分けると、第一部は「覚書」「会」、第二部「棚」「書院」「台子」、第三部が「墨引」「滅後」となる。第一部「覚書」は、利休の茶の伝統的な展開と、利休が創造した新しい茶の哲学、その根本理論を体系立てたものであり、「会」は、利休と著者宗啓が、豊臣秀吉を中心として営まれた茶会を記録したものであるということになっている。しかしこの会の記録は客観的な史料と整合性に乏しく、「利休百会記」をもとに他の茶会記録を付き合わせ、創作したものと推定されている。

第二部の「棚」「書院」「台子」は、利休の茶の詳細な技法の記録である。とりわけ「台子」は、一枚一枚の切紙五十余ものいわゆる切紙伝授を受けたものをまとめて一巻の巻物に仕立て、その全体をさらに利休が印可証明した、ということになっている。

第三部の「墨引」は、第二部の実技に対応して、曲尺割(かねわり)の法則という、「南方録」独特の厳密な茶法実演の美学を詳述したものである。この「墨引」は秘伝についてあまりに詳細に書きすぎるということで師、利休が墨を引いて消した、ということによってこの名がある。よって奥書はあるが印可はない。「滅後」も曲尺割について論じ、その他利休の説いた茶技・茶論を多方面に及んで取り上げている。

南方録の名言

「家はもらぬほど、食事は飢えぬほどにて足る事なり」

「世塵のけがれをすすぐ為の手水ばちなり」

「叶うはよし、叶いたがるはあしし」

「茶の湯の肝要、ただこの三炭三露にあり」

「夏はいかにも涼しきやうに、冬はいかにもあたたかなるやうに」

「小座敷の道具は、よろづたらぬがよし」

「あけ暮外にもとめて、花紅葉が我心にある事をしらず」